省力大規模化を目指すあなたへ
～転作大豆の狭畦栽培～

概　要 Abstract

①実態調査から転作大豆狭畦栽培のメリット、デメリットなどをまとめました。
②大豆の生育、収量、雑草抑制効果などから、狭畦栽培での適正な栽植密度を明らかにしました。

※狭畦栽培とは・・・畦幅を一般的な畦幅（60-66cm）より狭くした栽培体系です。

標準畦幅（66cm）

狭畦（30cm）

狭畦栽培は葉が地表を早期に覆い、雑草の生育を抑制する→除草の省力化が可能

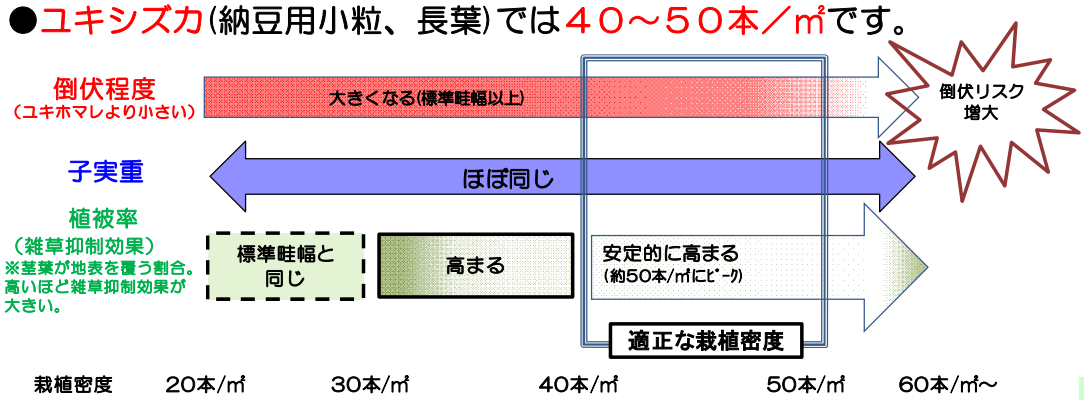
成　果 Results

概要（現状）など
●播種機：グレンドリル、コンビネーションドリル、不耕起対応のグレンドリルなど ●畦幅：19～30cm程度 ●品種：「ユキホマレ」、「ユキシズカ」など ●収量：標準畦幅栽培並 ●種草抜きは標準畦幅栽培並に必要 ●事前に播種量を確認して播種機の調整を行う（特に中大粒品種）

狭畦栽培のメリット、デメリットは？

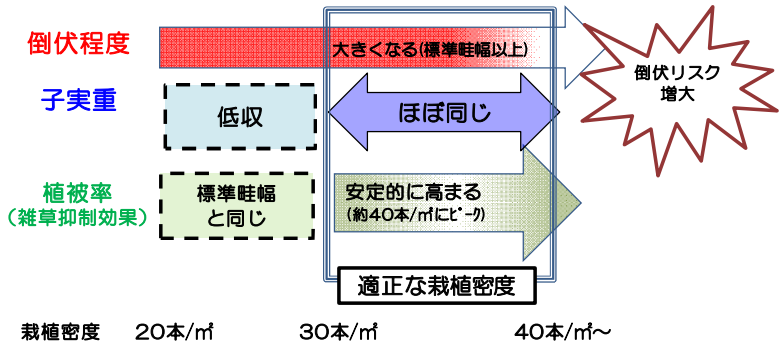
メリット	デメリット	狭畦栽培の可能性
●除草時間を約80%削減可能。 ●グレンドリルなどの利用率向上。 ●大豆専用機への初期投資なしに大豆栽培を導入できる。	●密植と除草剤散布（約3回）が前提で種苗費と農薬費が増大。 ●除草剤による雑草防除が不十分だと通常栽培よりも労働強化となる。	●省力大規模化に有効。 ただし、標準畦幅栽培以上に除草剤での雑草防除と排水対策の徹底、播種精度・出芽数の確保が必要。

●ユキシズカ（納豆用小粒、長葉）では４０～５０本／㎡です。

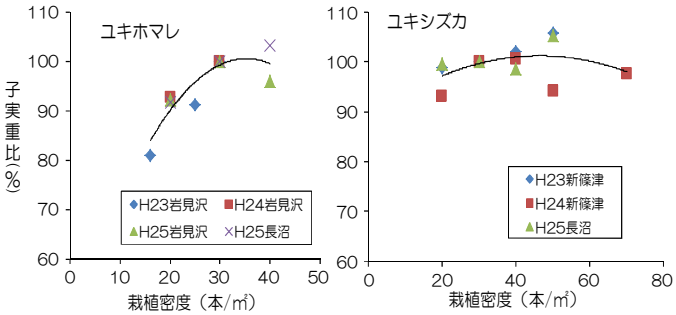


狭畦栽培での適正な栽植密度は？

●ユキホマレ（煮豆・豆腐用中粒、円葉）では30～40本／㎡です。



狭畦栽培での栽植密度と子実重の関係（現地試験）



普　及 Dissemination

本成果は、道央転換畑地帯の大豆狭畦栽培を実践している生産者、導入を検討している生産者、指導機関の参考として活用します。

連絡先 Contact

中央農業試験場
作物開発部 作物グループ
０１２３－89－2284
central-agri@hro.or.jp